

青山学院大学 学部別総評

★学部別傾向★

文学部（英文・仏文）と教育人間科学部が同日試験になり、文学部（史学・日文）と社会情報学部が同日試験になり、法学部が復活して国際政治経済学部と同日試験になるなど、青学も立教や上智のように同日に複数学部試験化しつつあり、そのことでやや傾向が見えにくくなっている。おそらく、学部別と言うより、試験日別に特色を持った問題となっているようだ。学部の内容的特色は、17世紀以降に限定された2/18の国際政治経済・法学部を除いて、ほとんど見受けられない。“文化史重視”か“戦後史重視”か程度である。

最大のポイントは、形式や問題のレベルに差があること、配点に違いがあることなどであり、12月以降のラストスパートでは、世界史の学習量には気を配りたい。過去問は受験予定学部を最低3年分やれば対策のイメージは湧いてくるだろう。また、スライド出題が見受けられるので、その他の学部を昨年・一昨年分（合計6種類×2年分）やると的中の可能性は高くなる。頻出用語が非常に多く、学部関係ナシに、1度出題された用語は確実に覚えていきたい。

★年度別傾向★

MARCHの他大学と同様に青学も同年流行が非常に強くなってきた。“青学固め打ち”効果ができるようになった。その流行単元・テーマの出題は年々増加傾向にあると共に、類似した国の他時代を出題する傾向も強いので、その年の他学部の問題の入手は不可欠だ。前述したように基本的にスライド出題もあるので、やはり、直近の他学部の問題研究が重要視されよう。

★全体的に★

基本はオーソドックスな空所補充がほとんどで、記述と選択は半分ずつ。レベルも8割が教科書レベルで、一問一答的な学習でも十分対応できる。頻出単元・分野・テーマを克服できれば、十分に高得点は狙える。

文学部史学科と国際政治経済・法学部Aの問題だけが少々特別。史学部だけ、通常の3問に200～300字の論述2問が追加される。国際政治経済・法学部は、正誤問題が大問1問分くらい出題され、これがなかなか手強い。その他は空所補充も用語レベルが圧倒的に高いのだ。しかも近現代限定なので、戦後史・時事問題は捨てられない。

内容的には全学部を通して、欧米史（比較的中世は少ない）の比率は高く、特に近現代史は重要

度を増す。特に英・米・仏革命期と19世紀の欧米諸国と2つの世界大戦や国際組織関連はかなり注目したい。中国史はアヘン戦争以後の通史が頻出で、それ以外は社会経済&遊牧民&周辺民族の動向などのテーマ史が中心である。その他のアジア史も比較的近代に偏っている。詳細は“青学ナショナリズム”を見てみよう。

配点面からみると、文学部・教育人間科学部は史学科を除いて英語重視。史学科でも世界史巧者が受けてくるだろうから、あの簡単な問題では点差がつかず、結局英語勝負になってしまう可能性がある。国際政治経済・法学部は配点以上に英語重視（他学部とは違い問題が難しい……）。英語苦手者は避けるべし。その他の学部は十分に世界史でも稼げる。努力によっては9割以上取れる出題が並ぶことになるので、多少他教科で失敗しても挽回できるのがこの大学の特色だ！

☆配点表☆

全学部：文学部	2/13の学部	英150	国100	地歴100		
	2/14の学部	英150	国150	地歴100		
	：その他の学部の配点	個別日程と配点は同じ				2/7
文学部英米文学科		英200	国100	地歴100	△	2/13
文学部フランス文学科		英200	国100	地歴100	△	2/13
教育人間科学部教育学科		英200	国200	地歴100	★	2/13
教育人間科学部心理学科		英200	国200	地歴50	★	2/13
文学部比較芸術学科		英200	国100	地歴100	△	2/13
文学部史学科		英100	国100	地歴100	☆	2/14
文学部日本文学科		英100	国150	地歴100		2/14
総合文化・社会情報学部		英150	国100	地歴100		2/14
経営学部		英150	国100	地歴100		2/15
国際政治経済・法学部		英150	国100	地歴100		2/18
経済学部		英150	国100	地歴100		2/19

※追記

2016年度入試より新たに「地球社会共生学部」が設置された。この学部のA方式が、2月21日入試として増えたことで「経済学B」「総合文化政策A」「法学部B」がその入試日に新設された。そのことで、ますます学部別傾向は薄れた。

全学部 A～C

オールマークの50問。正誤選択は7～8問（全体の2割弱）でその他は空所補充問題。文化史：戦後史は1：1で共に3～4問（合わせて2割弱）なので、合計で8割程度を狙うならば、文化史か戦後史をどちらか捨てて、確実に得点を取っていくのがよからう。大問は3問で欧米：アジア＝2：1。頻出分野はナショナリズムのつぶしで十分だろう。一問一答による人物・王朝・民族中心学習を!!

文（仏文・英米文・比較文芸）・教育人間科学部 A

出題形式は選択肢から選ぶ形式がメインで、記述は3割程度、標準レベルの用語が大半を占める。欧米史は古代～近現代まで満遍なく出題されるが、戦後史は少なく、文化史の方が注意したい。年代関連の設問が多いのも特徴。ほぼ毎年、中国やその周辺地域のテーマ（朝鮮・日本・北方民族・東南アジア）が出題されている。

文（日文・史学）・総合政策・社会情報学部 A～B ※史学のみC（論述）

文章選択問題はないが、用語レベルの難易度は易しくない。記述：選択＝2：1で、空所記述はやや苦戦するモノもあるが、全体的に基礎～標準レベルでオーソドックスな用語が並ぶ。アジア（中国は3年に1度？）・古代～近代ヨーロッパ・近現代欧米史を1問ずつで、バランスが良い。戦後史は少なく、文化の出題率が高い。文化史と宗教関連（キリスト教など）、社会経済史からの出題が多いので、近年の他学部の文化関連は必ずチェックしてから本番に臨みたい。

※2012年から総合文化政策・社会情報学部B方式が同じ問題になり、従来の文学部の問題に合わせた形となった。

経営 A～B

出題形式・欧米とアジアの比率は他教科と同じ。特徴的なのは、問題量が少し多いこと、年代整順・年代空所などの年代問題が多いこと、地図の出題がまれにあること、文化史・戦後史重視が読めないことの3点が特色である。大問が3問になったり、4問になったりするが、基本的に中国史は必須。この中国史の傾向はしっかり読んで対応したい。

国際政治経済・法〈A〉 A～C

出題形式は選択肢と記述式。17世紀以降の近現代史のみ、1問はアジア・2問は欧米史。2018年は大問4つになり問題量が増えた。同系統の問題を繰り返す（アメリカ・パレスティナ・核問題が多いなど）ので、過去5～6年分の問題には早めに目を通しておきたい。やや難～難問が3割強。戦後史は必須で、細かい年代を知らないと言誤選択を解答できないモノも少なくないので、気合を入れて早めに覚え始めたい（慶應上智レベルの年代暗記）。条約や国際会議・超現代史（1991年以降）に関する設問は難易度が高い。アジア史は戦後を除き少なめなので、英語で稼げるならば、欧米史に偏って学習し、確実に6割得点する方法がベストといえる。ただし、欧米の文化史は10%出題されるので、無視は禁物だろう。

経済 A～C

出題形式は全学部・2/13文学部と同じだが、欧米とアジアの比率は年によって違う。8割は標準レベルの用語。大問中に2～3問程度やや難ありだが、逃しても8.5割は取れる。文化史は隔年での出題、戦後史が出題されると点差が付くので注意したい。ポロポロと出題される年代は基礎的年号なのでカバーしたい。